

シンポジウム趣旨説明

2019年度光赤天連シンポジウム
「2030年代を見据えて光赤天連のあり方を考える」

和田 武彦

(ISAS/JAXA)

光赤外線天文学連絡会

運営委員会

開催趣旨

今後限られた予算の中で天文プロジェクトを推進し実を得るためには、各プロジェクトを有機的に結び付け戦略的に進めるためのビジョンを共有することが必須である。昨今のプロジェクトの大型化や国際化を鑑みると、コミュニティを超えた、あるいは天文学という枠組み自身を超えたビジョンを持ち、相互理解を進めることも重要である。

光赤天連では、光赤外将来計画検討書「2020年代の光赤外線天文学」を2016年に発行し、2018年には「20年後までのスペースミッションを考えるワーキンググループ」の検討報告を公表、そして現在、「2030年代将来計画検討ワーキンググループ」を立ち上げ議論を続けている。また、2018年度光赤天連シンポジウム「2030年代の光学赤外線天文学を考える -2018年秋-」を開催しコミュニティとしての意思をまとめつつ、「推薦委員会」による議論を経て、学術会議マスタープラン2020への将来計画の推薦を行った。さらに、すでに作成から5年を経た宇宙基本計画/工程表やJAXAの宇宙科学・探査ロードマップの大改訂も控えている。

このような状況の下、より強力・より機動的な将来計画を、コミュニティが主体的に責任を持って作り出していけるよう、継続的・組織的な将来計画策定の枠組みを作ることの必要性が認識されてきた。今回のシンポジウムでは2030年代にむけ、ポストTMT/すばる、ポストSPICAといった長期的な戦略も含めた、光赤天連としての将来計画策定の枠組みについて議論する。



光赤天連将来計画

- 光赤天連スペース将来計画シンポジウム 2014/11
- 光赤天連スペース計画の工程表 2015/11
- 2015年度光学赤外線天文連絡会シンポジウム2
- マスタープラン2017推薦 2016/2
- 2020年代の光赤外天文学-将来計画検討報告書 2016

- 20年後までのスペースミッションを考えるWG 2017
- 2030年代将来計画検討 WG 2018-2019
 - キーサイエンス、キー技術
- マスタープラン2020推薦 (2018/11)
- 2030年代将来計画検討ワーキンググループ

- NASA 2020 decadal survey
- 宇宙研 宇宙科学・探査工程表改訂

- 「2030年代の光赤外天文学-将来計画検討報告書」?

光赤天連の今後

多波長/多搬送媒体天文学の進展への対応

- 対象/現象指向天文学 (science driven astronomy)
- 手法/技術主導天文学 (detection driven astronomy)
- 大型施設/装置開発

という、微妙に次元が異なることから光赤天連がどうサポートしていくのか？

光赤天連がサポートしていくのか、発展的改組を遂げるのか？

(大型計画/将来計画に対して)コミュニティーとしての意思決定をするのかしないのか？

個人的には、

天文学はある意味、大型測定器ありきの装置産業であり、それをサポートしていくコミュニティが必要なので、光赤天連は、光赤外線/光学という従来の技術/手法の軸を今後も、しっかりとサポートしてくべき。

同時に、隣接分野(電波/波動 X線/一光子)や、光赤外線/光学でできる対象/現象には、HiZ-GUNDAMなどの経験をもとに節操なく侵食し、が、別途、対象/現象を軸とするコミュニティの立ち上げを支援する、という漠然としたイメージを持っています。

本シンポジウムの狙い

- 2030年代を睨んだ現状の確認
- 今後の計画をどのようにコミュニティーで作成していくか
 - 2030年代将来計画検討WG
- 光赤天連のミッションの再定義
 - 多波長・波長横断天文学への対応
 - 大型装置開発のサポート
 - 技術開発
 - 人材育成
 - やってくる大量のデータ

agenda

9/24

- セッション1: イントロダクション
 - 宇宙科学探査ロードマップ
 - 2020年代の計画

9/25

- セッション2: 2030年代に向けた光赤外コミュニティーの戦略
 - 「2030年代将来計画検討ワーキンググループ」検討結果報告
 - Astro2020/ESA Voyage 2050
 - 2030年代に私たちは何を知りたいのか(2030年代を担う若手の意見)
 - 日本独自の計画の立案と世界の大型計画への参画

9/26

- セッション3: 光赤外分野と近接分野の将来計画決定の枠組み
 - 総合討論
 - 光赤天連のミッション再定義